文 **バーナビ・ロジャーソン** 写真 **ポール・フリーマン**

EMPIRE BUILDER

帝国の造り主

名も無き歩兵から、オスマン宮廷の宮廷建築家としてトップの座に
上りつめたシナン。長期にわたる彼の並外れた業績は、
数多くの壮観なモスクや公共建築物を生み出し、
その多くは今も近代都市イスタンブールの象徴として威厳を放つ。

イスタンブールのような都市がほかにあるだろうか。一度も訪れたことのない人のためにあえて説明するなら、ローマの歴史とニューヨークのドラマを混ぜ合わせたカクテルのような都市だ。

夕暮れのイスタンブールを船で訪れる幸運に恵まれた人には、こんな説明は一切不要だろう。ボスポラス海峡の激しい潮流から浮き上がるように、中世のドームやミナレットのシルエットが、赤みを帯びた黄金色の空を貫くドラマチックな風景が、脳裏に焼きつけられるはずだ。手前では、数十隻のフェリーボートが、まるで子犬がはしゃぎ回るかのように縦横無尽に海峡を行き来し、背景には、金融街の高層ビルや当世風のホテルのきらめき、渋滞する道路、吊り橋、停泊中の何百という商船、飛行機などが、現代の大都市の証であるかのように混沌と渦巻いている。

わずか半日であれ、週末旅行であれ、イスタンブールにいったん足を踏み入れた人は、濃密な混乱に呑み込まれることになる。多くの場合、迷路のようなバザールやトプカピ宮殿の宝物館で道に迷ったり、ブルーモスクの巨大な礼拝堂に圧倒されたり、ドルマバフチェ宮殿の戴冠の間の光景やアヤソフィア大聖堂でメランコリーに満ちた威厳に触れたりしたことが、曖昧な記憶のなかに残るだろう。

イスタンブールを訪れる旅行者のなかで、「シナン」という言葉に反応する人は、時間と気力があり、デザインに多大なる好奇心を寄せる少数の人に限られる。オスマントルコ史上で最高の建築家が残した作品を訪ねてこの街を縦横に歩きまわるには、少なからざる労力を要する。シナン（「槍」の意）は1490年に、ギリシャとアルメニアの農民が住むアナトリアの小さな村に生まれたといわれている。20歳を過ぎた1512年頃、スルタンのセリム一世（冷酷帝）に仕える奴隷軍の兵士として徴兵された。この悪名高い徴兵制度によって「血の貢ぎ物」にされた若いキリスト教徒の多くは、スルタンの戦争で砲火の餌食とされる消耗品の兵士に過ぎなかったが、一方で、スルタンの宮廷に選ばれた後に昇進を繰り返し、最終的にパシャ（軍司令官・州知事）や大宰相といった帝国の要職につく可能性も残されていた。

その後およそ30年間のシナンは、イスラムへの改宗を含む基本訓練期間を経て、イェニチェリ（常備歩兵軍団）に配属され、ポンツーン（平底船）の建造や、兵舎の設計、騎兵隊の統率、造船、城壁爆砕の指揮などの仕事をマスターしながら、出世の階段を上った。彼はイェニチェリの要職に昇格し、敬虔なふたりの妻と数多くの子供たちや養子の甥子に囲まれ、イスタンブールの中心に心休まる家を構えた。軍務を通じてハンガリー、セルビア、ボスニア、エジプト、シリア、イラク、ペルシャ、さらに生まれ故郷のアナトリアなどに赴き、さまざまな伝統建築に直に触れる機会を得たことにより、1538年に宮廷建築技師の長に任命されたシナンは、類例のない統合力を発揮することになる。

次の30年間には、スレイマン一世（壮麗帝）をはじめとする皇族がこの宮廷建築家のシナンを重用し、神への贈り物をつくらせた。ここに、オスマン社会の本質的な信仰深さを垣間見ることができる。シナンが威厳あるパトロンのためにつくった夏の別邸（離れ）や、川べりの宮殿、市中の家屋はいっさい残っていない。このような宗教とは関係のない建築物は、木材・レンガ・漆喰で建てられた短命な建物だった。一方、神に敬意を表する神聖で宗教的な慈善団体に対しては、オスマン帝国のエリートたちは膨大な財貨を惜しみなく投入し、精巧で秩序ある石造りを採用した。

シナンの初期の創作の特徴は、素材使いに程よい調和がみられ、ほとんどロマネスク様式ともいえる秩序と永続性が強調されていることだ。装飾された石灰石を使った、質感と存在感に溢れた石造りの外壁は、壁から上に伸びるアーチや丸天井の部屋へと続き、銅の覆いのある複合的なドームの数々を支えている。シナンが残した、オスマン帝国の大聖堂ともいえる3大モスクは、明らかに石を用いた権力の象徴なのだ。モスクの中庭を取り囲む回廊の壁の上に、波紋のように連なる小ドームがあり、その上方に4分の1ドームや半ドームに支えられて、厳かにそびえる中央ドームがある。このイメージは宗教的、そして非宗教的なものの両方の感性に訴えかけるものがある。大モスクがひとつの頂点のドームから見下ろされるように、オスマン帝国もひとつのスルタンが君臨し、その権威は宰相、パシャ、ベイレルベイ（州総督）、アガ（将校）などが支柱として支え、信者を守っているのだ。

内部で必要とされるシンボリズムは、あらゆる数字が究極的にひとつに収束するように、正方形の礼拝堂とたったひとつのドームがあればよい。キリスト教世界の建築物では、内部空間がポーチや身廊、さらに礼拝堂を擁する側廊や内陣などに分けられ、聖職者と会衆の間の階層が表現されているが、これとは対照的だ。シナンが傾注したことは、ひとつの神のもとですべての信者は平等（かつ取るに足らないもの）であるがゆえに、礼拝者を極小に見せるただひとつの荘厳な礼拝堂をつくり上げることだった。壁タイル、ステンドグラス、彫刻など、すべての内部装飾はイスラムの祈りの方角、すなわちメッカの方角を示している。この時代の素晴らしいイズニック・タイルに見られる有名な多彩草花文（シャクヤク、カーネーション、チューリップ、風にそよぐ葦などを使った4色の草花柄）はイスラムへの信仰を暗喩するものであると同時

（上）1562～1565年にシナンはスレイマン一世の愛娘のためにミフリマ・スルタン・モスクを建造した。イスタンブール旧市街、ビザンチン帝国時代の古代城壁のすぐ内側にある第6の丘の上に位置している。［前見開きページ］シェフザーデ・モスクは皇太子のモスクで、シナンが最初に建造した大モスク。長男メヘメッドが21歳で逝去したことを悲しんだスレイマン一世の命を受けて1543年に建造が始まった。モスク礼拝堂の後ろ側にシナンは控えめな庭を設計したが、そこには皇太子の美しい八角形の墓がある。

（上）スレイマニエ・モスクは1550～1557年に、シナンが仕えるスレイマン一世のために建てられたもの。イスタンブールにあるオスマン帝国の建築物のなかで、最も偉大かつ荘厳な趣を湛え、静寂と調和と畏怖が感じられる。広大な墓地と8つの慈善施設の中心に立ち、その中庭は、貧しい人たちの食事の世話や、精神疾患者の介護、イスラム神学の教育、コーランの7つの異なる朗誦法の研究などを行う場として捧げられた。

にモスクの壁越しに大きな庭、すなわち神が創造した天上の楽園があることを気づかせてくれる。同じように、漆喰の壁や大理石の床を装飾する幾何学模様は、この世の雑念の渦のなかに、常にひとつの固定された中心があることを信者に教えてくれる。アラビア語のカリグラフィーが勝利を謳歌するような壮大なスケールでドームに描かれ、あるいは円筒支柱にメダリオンの形で吊り下げられ、アラビア語の祈りやコーランの詠唱の響きと一体になる。

シナンはシェフザーデ・モスク（早逝したスレイマン一世の息子を悼んで建てられたもの）を自分自身の駆け出しの頃の作品と見なし、スレイマン一世に捧げたスレイマニエ・モスクは優秀なる作品ととらえ、スレイマン一世の後継の息子セリム二世に献上したセリミエ・モスクを最高傑作と考えた。この3つの建造物はすべて予定した時間通りかつ予算通りにつくられたが、彼の全業績のほんの一部に過ぎない。彼は1588年に他界するまで、その生涯で476の建造物を監督・設計したといわれ、うち196が現存している。このなかには療養所、病院、霊廟、学校、噴水、イスラム学院、修行僧の修道院、公衆浴場もあり、これらはスレイマン一世の宮廷で重要人物が他界したときに、モスクに併設される複合施設としてつくられることも多かった。

これ以外にシナンは、宮廷建築家としての通常業務もこなしている。古代のモスクを修復したほか、数多くの橋（うちひとつはイヴォ・アンドリッチのノーベル文学賞受賞作『ドリナの橋』の題材にもなっている）を建設し、ローマ水道にも匹敵する水道橋でイスタンブールに真水を引き込み、さらにエルサレムの城壁も構築している。

シナンの業績で最も評価されるべきものは、皇族のために建造したモスクであろう。すべてが傑作というわけではないが、これは彼自身の才能の欠如というよりも、パトロンに介入されたり、中途のプロジェクトを引き継いだりしたことが原因であるといえよう。というのも、彼の細部への取り組みは、学生寮のつくり

［当見開きページ］
シナン自身が最高傑作と
認めるセリミエ・モスクは、
宮廷建築家の彼が
80歳の時に完成した。
スレイマン一世を継いだ息子
セリム二世に捧げるため、当時、
オスマン帝国の主要都市の
ひとつだったエディルネ
（旧アドリアノープル）に
建築された。エディルネは
現在のトルコの西端に位置する。

つけの棚であれ、完璧な通気性を示す煙突、流れのよい排水溝、壁に埋め込まれたバットレス（控え壁）であれ、常に非の打ちどころがないからだ。彼は不要な装飾を決して加えず、建物の本来の機能と目的を高めるために装飾を展開させた。

また、当時最も才能があるとされた職人に委託発注も行っていた。例えば、オスマン帝国時代のステンドグラスの奇才「酔っ払いのイブラヒム」や、タブリーズ陶器の伝統的な職人ギルド、宮廷に仕える書家（オスマンの伝統ではすべての芸術の頂点とされる）などだ。

時にシナンは自らの使命を深く理解し、パトロンの特徴的な側面を石のなかに表現することもあった。スレイマニエ・モスクに金細工職人の工房を並べているのは、スルタン自身にその技能があることを示唆するものだ。4つのミナレットはスレイマン一世がイスタンブールの統治者として4代目であることを表し、礼拝の時を知らせるムアッジン（告知係）のバルコニーを10ヵ所に配しているのは、皇帝が王朝設立から10代目であることを意味している。

さらに印象的なのは、オスマン政界の悪名高き人物ルステム・パシャを見事に表現したことだ。権謀術数のこの吝嗇家は、口の悪さで知られ、若い頃はクロアチアで豚飼いをしていたといわれているが、同時にスレイマン一世の忠実な名宰相でもあった。シナンはルステム・パシャに対し、最高にエレガントなモスクを捧げた。アーチ構造の地下納休堂は店舗や倉庫として貸し出されて、そのバザールの香りと喧噪は上方の精妙なる礼拝堂にも漂ってくる。この礼拝堂にはパシャのコレクションのなかから、カササギの巣を模したイズニック・タイルも飾られている。

シナンの最初にして最強の、そして間違いなく最も影響力のあったパトロンは皇女のミフリマだった。このスレイマン一世の丸顔の娘には、目がくらむほどの高さがあり、繊細な光が溢れた礼拝堂のあるミフリマ・モスクを霊廟として捧げた。数百年を経た今なお、街の古い城壁と忙しい高速道路の横で異彩を放ち、今日トルコの周辺地で建てられる現代モスクの大半は、ミフリマ・モスクをモデルとしている。

最後に、スルタンに仕えた有能な宰相のなかで、最も聡明で強い信念を持っていたソコルル・メフメト・パシャにもシナンはモスクを建立したが、このモスクほどパトロンと最高の建築家の固い絆を示しているものはほかにないだろう。モスクには強度、耐久性に加えて伝統があり、当時の秀麗さ、普遍的な魅力、独創性が込められている。だが、永遠の存在は保証できない。これに対してシナンは「審判の日が来るまでは存在するでしょう」と言ってパトロンを安心させたという逸話が残っている。

［当見開きページ］
ソコルル・メフメト・パシャ・モスクは1571～1572年につくられ、オスマン帝国の皇族女子で、大宰相ソコルル・メフメト・パシャの妻でもあったエスマハンに捧げられた。シナンと同様、ソコルル・メフメトはイェニチェリ（常備歩兵軍団）に属し、ボスニアのキリスト教徒の町から徴兵された。彼は帝国の最高位のポジションに上りつめた。